

「オタク」研究の新しい方向性

神戸大学 王男瀟

1 目的・方法

「オタク」とは、常に論争を呼び起こしている一つのテーマである。オタクという言葉の意味が非常に不明確であるが故に、多くの人々が既存の論者たちの結論には納得しかねている。本来、オタクの問題を論じる前に、その言葉自体についての考察をまず徹底的に行うのが筋である。とは言え、そのような考察ではオタクを社会現象として扱うことが難しい。このジレンマを乗り越えるには、まず、「オタクとは何か」という議論を正当でないものとして否定する必要がある。異なる時代は勿論、例え同じ時代でも、異なる階層やグループの間では、その解釈が多種多様であることが明らかであるが故に、特定の解釈ではなく、解釈に変化をもたらす力動及び利害関心に注目しなければならない（かつてウェーバーが古代ユダヤ教に関する考察を行ったように）。定義の不明確さを解決するためには、この「系譜学」的なやり方こそが得策であるように思える。

以上、今までにない新しい方向性を提示することで、社会学的なオタク研究の新しい可能性を切り開くことが、本報告の目的である。

2 結果・結論

オタクという言葉の意味について考察を行った結果、二つの重要な事実が明らかになった。複数の論者が示唆しているように、九十年代後半から、平仮名から片仮名による表記への移行に際して、言葉の意味が大きく変わったという事実が存在する。それと、言葉の乱用により、自認が逸脱に繋がるという「オタクのパラドックス」が生じたこと（「オタクが情報資本主義をリードする情報強者」という宣伝に惑わされ、「オタク」と積極的に名乗り出る人が情報強者ではあり得ない）である。以上の事実から、「おたく」、「オタク」そして「逆説的なオタク」という三つの理念型を構築することができる。

解釈に変化をもたらす力動は、基本的にこの三つの理念型の間、そしてその外部（一般人）との間に生じた緊張と説明できる。更に、その緊張を生み出す力動と言えば、承認をめぐる闘争、いわゆるアイデンティティを奪い合うゲームである。故に、アイデンティティに関する社会学の理論が必要になってくる。「オタク」の持つその差別的な意味合いを考えれば、当たり前之选択と言えよう。しかし、考察の結果が示したように、その緊張は基本的に「おたく」とは殆ど関係がなかった。「おたく」は今までずっと社会の裏側に、世間の評判に無関心でい続けてきた。結局、「三十年以上前に既に存在していた社会現象」という原点に回帰するにあたって、今までの議論の一部をダミーとして捨てなければならない。「おたく」的なアイデンティティのあり方が「オタク」または一般人のそれとは根本的に異なる、という可能性を想定する必要があり、そのあり方がどのように構築・維持されるのか、そしてそれが他の人とはどのように、何故異なるのかを説明しなければならない。しかし、「人間は他者からの承認を目指して闘争しなければならない」及び「人間のアイデンティティは他者に依存する」という自明な前提を崩さなければそれは難しい。そのために、自己アイデンティティが他者との関係性についての新しい解釈が求められている。